広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第55号　2006　107－114

見方・考え方を育てる中学校地理授業の開発

― 小単元「家族と空間について考える」の場合 ―

丹生英治・田中　伸・二階堂年惠・田口紘子

（2006年10月５日受理）

A Study on the Development of a Junior High School Geography Course for developing a new view: Unit Plan “Considering a home and house”

Eiji Nyu, Noboru Tanaka, Toshie Nikaido, and Hiroko Taguchi

The purpose in this paper is to develop the lesson plan for teaching junior high school social studies to consider a home and house.

We developed the unit plan “Considering a home and space.” The aim of this plan is to recognize the perspectives and views of a house.

We have prepared two views of space to plan the unit. One is a common knowledgement view. Another is a Sociological view.

As students have a common knowledgement view already, we have planed the lesson that they recognize a common knowledgement view and a Sociological view. As a result of this plan, students will be able to consider how to make a society using two views.

Key words: Junior High School Geography Course, View of sosiety, Home, Housing space
キーワード：中学校地理的分野，見方・考え方，家庭，住居空間

Ⅰ．中学校社会科地理的分野における見方・考え方

本稿の目的は，家族と空間について，住居における部屋の配置とその機能を具体的な教材とし，見方・考え方を育成する中学校社会科地理単元（授業）を開発し，それを提示することである。

中学校社会科地理的分野は，特定の地域の特色や地域性の理解を中心とする地誌学習[1)]から，地域的特色をとらえるための視点や方法といった見方・考え方の学習へと移行してきた[2)]。しかし，地域的特殊性に着目するあまり，その地域の特色を知識として理解することが目的化したり，特定の視点からの学習によって限られた空間認識を子どもたちに形成してしまうといった課題が考えられる。

そこで以下，本稿では，子どもたちにとって身近で，具体的に考えやすいと思われる，家族と住居空間を事例として授業を開発し，提示する。

Ⅱ．地理的分野における空間認識の現状と課題

平成10年版の中学校学習指導要領では，地理的分野の基本的な目標に，「地理的な見方や考え方の基礎を培う」として，「…地理的事象やその空間的な配置，秩序などを成り立たせている背景や要因を…追究し，とらえる」ことが示されている[3)]。本研究は，この目標の枠内で，家族と住居との関係を事例にして，住居における部屋の配置が家族の関係にどのように作用しているのかという問題を探究するように開発した。

しかし，学習指導要領におけるこの目標は，「地域という枠組みの中で，地域の環境条件や他地域との結び付きなどと人間の営みとのかかわりに着目して追究」[4)]するように，制限されている。中学校の地理的分野の教科書をみてみると，「日本の伝統的な生活の特色」として，「気候は家のつくりや人々の生活に大きな影響をあたえてきました。」，「住宅の屋根の形に

着目してみると，切妻は全国各地に見られますが，寄棟は太平洋側，入母屋は近畿地方に目立ちます。」といった記述がみられる[5]。つまり，伝統的にみられる住宅の屋根という事象が日本列島という空間にどのように分布しているのか，その要因を考察する際に，環境条件などとのかかわりで，といった制限をすることで，結果的に，住宅のつくりはある気候条件における人間の生活に応じてできている，という空間認識を形成している。この場合には，子どもたちの認識を特定の空間認識に限定してしまっているという問題点をもっている。地理的分野における空間認識形成の問題として，以下の二点を挙げることができる。まず，空間の配列の要因を地理的な条件から探究することに制限しているため，社会的な条件からも探究するという考え方を排除していること。次に，人間の営みとのかかわりという考え方は，人間の実際の生活が空間の配置をつくるというものに限定され，空間の配置によって人間の生活が操作されるというものが排除されていること，である。これらの問題点を作り出した要因は，子どもたちの空間認識が一つの見方・考え方に特定化されていることにある。

そのため，本研究では，一つの見方・考え方を教えることを目的にせず，複数の見方・考え方の認識が可能になるように，家族と空間について二つの見方・考え方を併置して教える地理授業を開発することにした。

Ⅲ．地理単元「家族と空間について考える」

1．単元の開発過程

本研究では，単元を開発するうえで，見方・考え方が重要な役割を果たす。というのも，子どもたちは，本稿でテーマとする家族や空間について考えたことがあっても，家族のみ，あるいは空間のみというように，それぞれを別個に考え，家族と空間を関連付けて考えることがほとんどないと思われる。そのように，考えたことがないことを教えるには，知識だけでは不充分であり，見方・考え方を習得することが大切だからである。

本研究では，家や家族に関する研究の現状から，大別して二つの見方・考え方，つまり常識的見方・考え方と，社会学的見方・考え方を準備し，中学校地理単元「家族と空間について考える」を開発した。

家族と空間に対する常識的見方・考え方と社会学的見方・考え方という二つを設定すると，二通りの見方・考え方があり，それぞれに根拠がある，ということを認識させることができる。

2．地理単元「家族と空間について考える」の全体構造

(1) 見方・考え方の構造

開発した地理単元「家族と空間について考える」において中心となる「家族と住居空間に対する見方・考え方」を図示したのが，次頁の構造図である。

構造図には，家族と住居空間について，常識的見方・考え方と社会学的見方・考え方という二つの見方・考え方を上下に分けて示している。

図の上に示した常識的見方・考え方は，端的にいえば，空間に合うように人々の行動を変えるべきである，という考え方である[6]。

この見方・考え方は，まず，家族の関係が希薄になっているという近年の家族の状態に対し，直感的に，常に食卓をともにし，団らんのある，常時家族であるような関係を求める（第一段階）。そのような，家族間の親密な関係を回復するべきであるという主張は，愛情のあふれるような家族が望ましい，といった家族観を自明のものとしてイメージすることによって理由付けられる（第二段階）。さらに，親密な家族間の関係が自明視されるのは，かつての伝統的な住居の間取りや部屋の機能が人間の生活に合わせて作られていた，という，空間の配置と人間の生活との関係についての記憶[7]によって根拠付けられる（第三段階）。最後に，集団としての意識が成員にとって強固なものとなるような空間の形成，が理想とされる（第四段階）。

一方，図の下に示した社会学的見方・考え方は，人々の行動に合うように空間を変えるべきである，という考え方である[8]。

この見方・考え方は，まず，家族の関係が希薄になっているという近年の家族の状態に対し，直感的に，たまに食卓をともにする程度で，団らんは特に必要とせず，時折家族をする[9]というような関係を認める（第一段階）。そうした希薄な家族間の関係を認めるのは，親密な関係を強いられることを「暑苦しい」[10]とする家族観を想定し，単に同じ家に住んでいるという最小限の，家族の共通項を示すことによって理由付けられる（第二段階）。さらに，最小限の家族間の関係を認めるのは，住居の間取りや部屋の機能は人間の生活の仕方[11]であるにすぎない，という考えによって根拠付けられる（第三段階）。最後に，個々の選択による自由な空間の形成が理想とされる（第四段階）。

これら二つの見方・考え方の違いは，空間をどのように考えるか，の相違である。このような二つの見方・考え方を獲得することが，本単元の目的である。

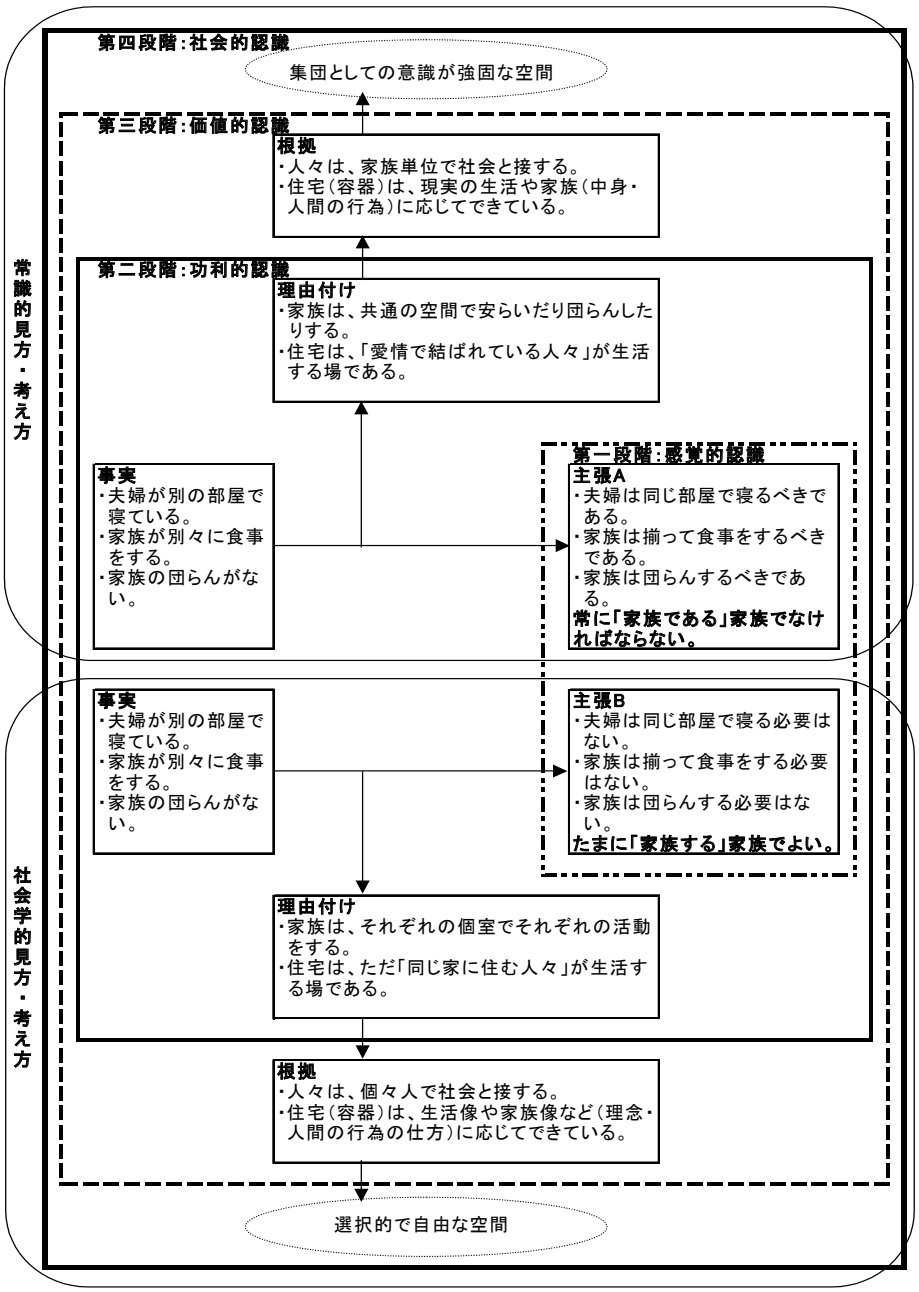

図　家族と住居空間に対する見方・考え方の構造

(2) 単元の構造

開発した単元は，生徒が，二つの見方・考え方に出会い，それぞれの基盤にある論理的根拠を理解し，家族と空間に関する，相違する二つのあり方について考えることができるように，構成されている[12)]。

単元は，教材内容として，家族と空間，つまり住居空間を取り上げ，以下のように構成した。

まず，生徒は導入で，日常生活における経験から，ある空間とその空間内での人々の行動，つまり規範と現実との関係には，常識的見方・考え方と，社会学的見方・考え方という，二つの見方・考え方があることを知る。

そして，展開では，まず，主張Ａの常識的見方・考え方を，次に，主張Ｂの社会学的見方・考え方を吟味・検討する。

終結では，二つの見方・考え方が理想とする空間のあり方の相違を確認する。

(3) 単元の展開構造

単元は，導入，展開１～６，終結，という八つの部分として構成した。展開１～３が常識的見方・考え方を吟味・検討させる過程であり，展開４～６が社会学的見方・考え方を吟味・検討させる過程である。

導入では，家族と空間の関係には二つの見方・考え方があることに気付かせる。つまり，空間を現実とするのか，規範とするのか，である。

展開１～３は，常識的見方・考え方を吟味・検討させる過程である。

展開１では，近年の家族の状態を問題としてとらえ，家族は，常に家族である，という意識が必要である，という主張を認識させる。

展開２では，家族は，共通の空間で安らいだり団らんしたりするものであり，愛情によって成立するものである，ということを認識させる。

展開３では，住居は，現実の生活や家族に応じてできている，ということを認識させる。

展開４～６は，社会学的見方・考え方を吟味・検討させる過程である。

展開４では，近年の家族の状態をとらえ，家族は，たまに家族する，という意識でよい，という主張を認識させる。

展開５では，家族は，各自の個室でそれぞれの行動をするものであり，単に同じ家に住むことによって成立するものである，ということを認識させる。

展開６では，住居は，生活像や家族像といった理念に応じてできている，ということを認識させる。

終結では，二つの見方・考え方は，それぞれ異なる社会空間のあり方を理想としている，ということを認識させる。常識的見方・考え方は，集団としての意識をその集団の成員にとって強固にするような空間の形成を理想としている。そして，社会学的見方・考え方は，個々人がそれぞれ，自身の行動を自由に選択できるような空間の形成を理想としている。

３．地理単元「家族と空間について考える」

(1) 単元名：「家族と空間について考える」

(2) 単元の目標

以下の二点を理解することで，家族と空間，あるいは住居に対する見方・考え方を獲得することができる。

①家族と空間に対する認識には，常識的見方・考え方と社会学的見方・考え方という二つの考え方があること。

②住居は，現実の生活や家族に応じて，もしくは生活像や家族像などに応じてできていること。

(3) 到達目標

理解目標

①近年の家族をめぐる現実を問題としてとらえ，そのような問題への対応を規範とのかかわりで，現実を規範に合わせるべきである，規範を現実に合わせるべきである，という二つに大きく分類し，二つの主張を理由付ける家族観の特色をとらえる。

ⅰ　家族とは，共通の空間で安らいだり団らんしたりする，「愛情で結ばれている人々」であり，常に「家族である」という家族観。

ⅱ　家族とは，それぞれの個室でそれぞれの活動をする，ただ「同じ家に住む人々」であり，たまに「家族する」という家族観。

②二つの見方・考え方には，それぞれの住居論が基盤にあることを理解する。

ⅰ　住居は，現実の生活や家族に応じてできている，という考え。

ⅱ　住居は，規範としての生活像や家族像に応じてできている，という考え。

③二つの見方・考え方によって，それぞれどのような社会空間が形成されると考えられるのか，理解する。

ⅰ　常識的見方・考え方によって，集団としての意識が強固な空間が形成されると考えられる。

ⅱ　社会学的見方・考え方によって，選択的で自由な空間が形成されると考えられる。

技能・態度目標

①住居と空間について，相違する二つの見方・考え方を対比し，区別することができる。

②二つの住居論の相違をふまえ，社会空間のあり方を判断し，選択するとともに，他の可能性について追究することができる。

(4) 単元の展開

過程			教師の中心発問・指示	教授学習活動	予想される生徒の答え
導入		二つの主張に出会う	わたしたちの社会には，こうあるべきだ，こうしなければならない，といった，わたしたちの行動を方向づける考えがあります。このような考えを理念や規範といいますが，身近なところでは，例えばどのようなものがあるでしょうか。 このような規範に対して，みなさんはどう行動しているでしょうか。 規範を当然守るべきものとして，自分の行動を規範に合わせているでしょうか。 あるいは，規範は自分の行動に合っていないから，規範を変えようとしている，もしくは変えようと考えているでしょうか。 そのとき，電車や学校という場所は特定の空間を作っています。 この空間はわたしたちの行動や規範に対してどのように作用しているのでしょうか。	T：発問する P：答える T：発問する	(例) ・電車の中では携帯電話の電源を切るべきである。 ・授業中は静かにしなければならない。 ・クラスは一致団結するべきである。 など
		提案	近年，夫婦が別の部屋で寝ている，家族が別々に食事をする，家族の団らんがない，といったことが現実に起きているとされています。 この現実には，わたしたちが住んでいる住まい，住居空間はどのように作用しているのでしょうか。 これから，家族をめぐる規範や現実と空間の関係について，二つの考え方をみていきましょう。	T：説明する T：発問する T：提案する	
展開1～3 常識的見方・考え方	展開1（第一段階・感覚的認識）	主張Aの事実の検証	近年，家族にはどのようなことが起きているのだろう？	T：資料1を提示する	・夫婦の寝室が別々である。 ・子どもがリビングルームに出てこない。 ・食事時にも全員が揃わない。 ・食事中に携帯電話を使い，家族の会話がない。
		まとめ	このような家族の状態に対し，みなさんはどのように考えるでしょうか？ なぜ，常に家族であるべきなのだろう？	T：発問する P：答える T：発問する	・夫婦は同じ部屋で寝るべきである。 ・家族は揃って食事をするべきである。 ・家族は団らんするべきである。 ・常に，家族であるという意識が必要である。 （答えは求めない。）
	展開2（第二段階・功利的認識）	主張Aの事実に対して理由付けを行う	揃って食事をしたり，団らんのある家族とは，どのような家族なのだろう？ 団らんのある家族は，住宅をどのようにとらえているのだろう？	T：資料2を提示する T：発問する P：答える	家族が居間に団らんして主人（父親）の仕事の疲れを忘れさせる，ような家族。 ほのぼのとした，愛情のあふれる家族。 住宅は，家族が揃って食事をしたり，談笑したり，布団を並べて寝たりする場である。
		まとめ	資料にある家族は，家の中でどういうことをしているでしょうか？ 家族とは，どういうものだといえるでしょうか？ 住宅とは，どういうものだといえるでしょうか？	T：発問する P：答える T：発問する P：答える T：発問する P：答える	家族は，共通の空間で安らいだり団らんしたりする。 家族は，「愛情で結ばれている人々」である。 住宅は，「愛情で結ばれている人々」が生活する場である。
	展開3（第二段階・価値的認識）	主張Aの理由付けに対して根拠付けを行う	団らんのある家族の資料は，いつのものだろう？ かつては団らんのある家族が当然であるように描かれていました。 さらに昔の家族は，どのような家に住んでいたのだろう？	T：発問する P：答える T：資料3を提示する P：答える	1916年。 土間がある。 囲炉裏がある。 部屋はふすまや障子で仕切られていた。

展開1～3　常識的見方・考え方	展開3（第二段階・価値的認識）	主張Aの理由付けに対して根拠付けを行う	土間はどのように使われていたのだろう？	T：発問する P：答える	土間では家族が共同して働いていた。
			囲炉裏はどのように使われていたのだろう？	T：発問する P：答える	暖をとったり，煮炊きをするほか，囲炉裏の周りに家族が集まり，物語を聞いたりしていた。
			ふすまや障子で仕切られることで，部屋はどのように使うことができたのだろう？	T：発問する P：答える	ふすまや障子を取り払うことで，大部屋として使うことができた。
			ふすまや障子で仕切られていた各部屋は，個々の部屋として意識されるだろうか？	T：発問する P：答える	個々の部屋としての意識は弱いといえる。
			住居の外の村落社会と，住居の中の各部屋との関係は，どのようになっていたのだろう？	T：発問する P：答える	住居の外⇒玄関・台所（土間）⇒座敷（囲炉裏）⇒奥の部屋，という順序になっている。
			土間は，どのような役割を果していたのだろう？	T：発問する P：答える	土間は，外部の公的な空間としての村落社会と，内部の私的な空間としての座敷とをつなぐ中間的な空間として機能していた。
			外部から人が来た場合を考えると，住居の中の部屋の配置は，どのようになっているといえるだろう？	T：発問する P：答える	住居の奥に行くにつれて，家族にとって関係の深い，親密な者だけを通すようになっている。
			昔の村落社会と住居とを，公的な空間と私的な空間として考えると，どのような関係にあったといえるだろう？	T：発問する P：答える	昔の住居は，公的な空間から私的な空間への開口部が限られていた。 そのため，昔の住居は私的な空間へと侵入する者を管理するシステムが強固であったといえる。
		まとめ	人々は，社会とどのように接しているのだろう？	T：発問する P：答える	人々は，家族単位で社会と接している。
			住宅は，何に応じてできているのだろう？	T：発問する P：答える	住宅（容器）は，現実の生活や家族（中身）に応じてできている。
			なぜ，常に家族であるべきなのだろう？	T：発問する P：答える	安らぎのある生活をし，また，団結して社会に接するため。
			このような家族の見方では，住宅（住んでいる空間）はどのようなものと考えられているのだろう？	T：発問する	（答えは求めない。）
展開4～6　社会学的見方・考え方	展開4（第一段階・感覚的認識）	主張Bの事実の確認	近年，家族にはどのようなことが起きているのだろうか。	T：資料1を確認する	・夫婦の寝室が別々である。 ・子どもがリビングルームに出てこない。 ・食事時にも全員が揃わない。 ・食事中に携帯電話を使い，家族の会話がない。
		まとめ	家族の問題に対し，どのような考えがあるでしょうか？	T：発問する P：答える	・夫婦は同じ部屋で寝る必要はない。 ・家族は揃って食事をする必要はない。 ・家族は団らんする必要はない。
			なぜ，常に家族である，という必要はないのだろう？	T：発問する	（答えは求めない。）
	展開5（第二段階・功利的認識）	主張Bの事実に対して理由付けを行う	団らんの少ない家族は，どのような生活をしているのだろう？	T：発問する P：答える	コンビニエンスストアや外食で食事をする。 多くの時間をそれぞれの個室で過ごす。 各自のテレビや携帯電話がある。
			団らんの少ない家族は，住宅をどのようにとらえているのだろう？	T：発問する P：答える	住宅は，別々の生活をする人々が，家族として同じ屋根の下にいる，というだけの場である。
		まとめ	家族は，家の中でどういうことをしているでしょうか？	T：発問する P：答える	家族は，それぞれの個室でそれぞれの活動をする。
			家族とは，どういうものだといえるでしょうか？	T：発問する P：答える	家族は，ただ「同じ家に住む人々」である。
			住宅とは，どういうものだといえるでしょうか？	T：発問する P：答える	住宅は，ただ「同じ家に住む人々」が生活する場である。

展開4～6　社会学的見方・考え方	展開6（第二段階・価値的認識）	主張Bの理由付けに対して根拠付けを行う	近年の家族は，どのような家に住んでいるのだろう？	T：資料4を提示する	・部屋どうしは壁で仕切られ，それぞれの個室が明確に分けられている。 ・リビングやダイニングキッチンがある。
			リビングやダイニングキッチンは，どのように使われているのだろう？	T：発問する P：答える	・たまに食事のときなどに集まる部屋として使われている。 ・常に団らんする部屋として使われているわけではない。
		まとめ	リビングやダイニングキッチンは，なぜ必要なのだろう？	T：発問する P：答える	来客の際などに体裁をつくろうためにつくられている。 家族は団らんするべきだ，といった規範に従って作られている。
			人々は，社会とどのように接しているのだろう？	T：発問する P：答える	人々は，個々人で社会と接している。
			住宅は，何に応じてできているのだろう？	T：発問する P：答える	住宅（容器）は，生活像や家族像など（理念）に応じてできている。
			なぜ，常に家族である，という必要はないのだろう？	T：発問する P：答える	他者に拘束されず，自身で選択しながら社会に接するため。
			このような家族の見方では，住宅（住んでいる空間）はどのようなものと考えられているのだろう？	T：発問する	（答えは求めない。）
終結（第四段階・社会的認識）		新しい主張	家族と住居について，学習した二つの考え方をまとめよう。 ・家族の問題に対して，どのように対応するべきか？ ・家族は，どういう生活をしている人々を指すのか？ ・住居は，何に応じてできているのか？	T：指示する P：まとめる	学習したことをまとめる。
			二つの考え方は，それぞれ，どのような空間を理想としているのだろう？	T：発問する P：答える	①集団としての意識を強固にするような空間。 ②個々人がそれぞれ，自由に選択するような空間。
			この二つの考え方には，どんな違いがあるのだろう。また，これらの考え方は，家族のあり方に対して，どのように作用しているのだろう？	T：発問する P：答える	①家族の関係が希薄になりかけたときに，家族間の愛情を回復させるように作用する。 ②家族の実態に合わせ，それを容認するように作用する。

資料1．近年の家族の話：藤原智美『家族を「する」家』プレジデント社，2000，pp.122-127。
資料2．昔の家族の話：山本理顕『住居論』住まいの図書館出版局，1993，p.66。
資料3．昔の家の間取り：中川武『日本の家　空間・記憶・言葉』TOTO出版，2002，p.133。
資料4．集合住宅の間取り：上野千鶴子『家族を容れるハコ家族を超えるハコ』平凡社，2002，p.6。

Ⅳ．結　語

本稿の目的は，家族と空間について，住居における部屋の配置とその機能を具体的な教材とし，見方・考え方を育成する中学校社会科地理単元（授業）を開発し，それを提示することにあった。

以上において提示した，家族と住居空間の単元は，中学校社会科地理的分野の課題の一つの側面を指摘し，それを克服する方途を見方・考え方の複数化に求め，それにもとづいて，これまで着目されてこなかったテーマを事例に用いて，授業を開発した。このような授業の開発を通して，中学校地理の改善方法を提示することができたと考える。

【註】

1）児玉修「地誌学習」森分孝治・片上宗二編『社会科重要用語300の基礎知識』明治図書，2000，p.201。
2）大杉昭英「中学校社会科における『見方や考え方』の検討－地理的分野と公民的分野の比較を通して－」社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第14号，2002，p.89。
3）文部科学省『中学校学習指導要領解説　社会編（平成16年5月一部補訂）』大阪書籍，1999，pp.21-23。
4）同上，p.23。
5）五味文彦ほか『新編　新しい社会　地理』東京書籍，2006，pp.156-157。

6）主に，以下の文献に依拠した。
藤原智美『家族を「する」家』プレジデント社，2000。

7）例えば，囲炉裏に関して以下のような記述がなされている。
「遠縁のおじさんが，…不思議な話をよくしてくれて，…とても楽しみだった…。…不思議な感慨は間違いなくあの炉端の空間と結び付いていて，他のどんな場所であっても，あのワクワクする話は聞けなかった，と思われてくる…。」中川武『日本の家　空間・記憶・言葉』TOTO 出版，2002，p.100。

8）主に，以下の文献に依拠した。
上野千鶴子『家族を容れるハコ家族を超えるハコ』平凡社，2002。
山本理顕『住居論』住まいの図書館出版局，1993。

9）「家族である」「家族する」といった表現は，以下の文献を参考にした。
上野千鶴子『家族を容れるハコ家族を超えるハコ』平凡社，2002。
藤原智美『家族を「する」家』プレジデント社，2000。

10）上野千鶴子『家族を容れるハコ家族を超えるハコ』平凡社，2002，p.68。

11）山本理顕『住居論』住まいの図書館出版局，1993，pp.61-76。

12）本研究は，以下に示す研究の継続研究である。
・池野範男・渡部竜也・竹中伸夫「『国家・社会の形成者』を育成する中学校社会科授業の開発－公民単元『選挙制度から民主主義社会のあり方を考える』－」『社会科教育研究』No.91，2004。
・池野範男・竹中伸夫・田中伸・二階堂年惠・川上秀和「小学校社会科における見方・考え方の育成方略－単元『地図とはどのようなものでしょうか？地図について考えてみよう！』を事例として－」『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部（文化教育開発関連領域）第53号，2005。
・池野範男・竹中伸夫・田中伸・二階堂年惠・丹生英治「公民単元『国際連合について考える』－「国家・社会の形成者」を育成する中学校社会科授業の開発(2)－」『広島平和科学』№27，2005。

【主要参考文献】

上野千鶴子『近代家族の成立と終焉』岩波書店，1994。
上野千鶴子『家族を容れるハコ家族を超えるハコ』平凡社，2002。
J. F. グブリアム，J. A. ホルスタイン（中川伸俊・湯川純幸・鮎川潤　訳）『家族とは何か　その言説と現実』新曜社，1997。
中川武『日本の家　空間・記憶・言葉』TOTO 出版，2002。
藤原智美『家族を「する」家』プレジデント社，2000。
山本理顕『住居論』住まいの図書館出版局，1993。
山本理顕『建築の可能性，山本理顕的想像力』王国社，2006。